

令和4年度 伊那弥生ヶ丘高校平和宣言

昭和20年8月6日午前8時15分、一発の原子爆弾により広島
の街は一瞬で破壊し尽くされました。大量の放射線が人々の体
を貫き、想像を絶する熱線と爆風が街を襲いました。56万人の
市民のうち、14万人が亡くなりました。「75年は草木も生え
ない」といわれた広島は今復興を遂げ、世界中の人々が平和を
象徴する都市として訪れる場所となりました。しかし、放射能
に体を蝕まれ、後遺症に苦しみ続けている被爆者は、あの日の
ことを1日たりとも忘れることはできないでしょう。

原子爆弾は戦争の中で生まれました。そして、戦争の中で使
われました。原子爆弾の凄まじい破壊力を身をもって知った被
爆者は、核兵器は存在してはならない、そして二度と戦争をし
てはならないと深く、強く、心に刻みました。日本国憲法にお
ける平和の理念は、こうした辛く厳しい経験と戦争の反省の中
から生まれ、戦後、我が国は平和国家としての道を歩んできま
した。日本にとっても、私たちにとっても、戦争をしないとい
う平和の理念は永久に変えてはならない原点です。

ロシアによるウクライナ侵攻では、国民の生命と財産を守る
為政者が国民を戦争の道具として使い、他国の罪のない市民の
命や日常を奪っています。そして、世界中で、核兵器による抑
止力なくして平和は維持できないという考えが勢いを増してい
ます。これらは、これまでの戦争体験から、核兵器のない平和
な世界の実現を目指すこととした人類の決意に背くことではな
いでしょうか。武力によらずに平和を維持する理想を追及する
ことを放棄し、現状やむなしとすることは、人類の存続を危う
くすることにほかなりません。

過ちをこれ以上繰り返してはなりません。とりわけ、為政者
に核のボタンを預けるということは、あの時の地獄絵図の再現
を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。
一刻も早く全ての核ボタンを無用のものにしないでなければな
りません。

私たち伊那弥生ヶ丘高校2学年一同は、原子爆弾により亡く
なられた方々に追悼の意を捧げ、核兵器のない世界と平和の実
現に向けて、全力を尽くし続けることを誓い、ここに平和宣言
とします。

2022年12月6日
長野県伊那弥生ヶ丘高等学校2学年一同